

ジャパブロックフェアに参加して

ニューヨーク事務所

1. ジャパブロックフェア (JBF) とは

一言で表現するならば、日本の「お祭り」の雰囲気再現した、子供から大人まで誰でも楽しめる屋外ストリートフェアといったところである。具体的には、日本のお祭りでよく見られるB級グルメの屋台や金魚すくいといった、ザ・ジャパニーズ露店の数々、ステージにおける書道や太鼓といったパフォーマンスなど、お祭り好きであるニューヨーカーに向けた日本の理解促進を目的に開催されているイベントである。

主催者は、ニューヨークにある日系企業の EMENT inc. が中心となって企画、様々な企業等の後援を受けて運営している。

2011 年は 5 月 22 日に開催され、私も宮城県人会によるチャリティブースにおいて、参加したことから、本イベント状況を紹介させていただきたい。



イベントの広報チラシ

2. 5月22日(日)のJBFの特色

今回は、3月11日の大震災があったため、イベント全体が日本復興という大きなテーマの下、準備の段階から非常なる盛り上がりを見せており、ステージにおけるパフォーマーについても例年以上に多くの著名人が集まる形となった。会場はニューヨークの中心地グランドセントラル駅前の1ブロック (Park Avenue, 40th~39th) で、誰もが簡単にアクセスできるほか、駅利用者がイベントを知らなくとも気軽に立ち寄ることができる、非常に良い立地条件での開催となった。



イベント全体の様子

ニューヨーク市ではこのようなイベントについては単体での開催を認めてくれず、ある程度の規模が必要なため、他のイベントと共同での開催が基本である。実際のところ、今回のイベントは、“Annual Murray Hill Neighborhood Festival & Taste of Murray Hill” という Park Avenue の 5 ブロック (40th ~ 35th) 一体のイベント (3 件ほどのイベントの集合) として開催されたことを考えると、JBF の開催位置が間違いなく最も良い位置とだったといえる。これも JBF のイベントが日本復興を掲げたチャリティイベントであったことが、配慮されてのことと思われた。

3. イベント当日

本イベントにおける数多くのブースの中には、被災地域の県人会によるチャリティブースも多く立ち並んでおり、それぞれチャリティ募金を集めるために製作したグッズ等を持ち寄って販売していた。

その一角において、宮城県人会はこの日のために製作したTシャツ（2種類）、折鶴のアクセサリ、缶バッジ、関係企業から無償提供いただいたおにぎり、日本茶などといった飲食品を販売したほか、適宜ドネーション（寄付）を求める活動を展開した。ブースには、宮城県の地方紙の記事スクラップを貼り出すなど、“尋常ではない被害を与えた地震のイメージ”と、地元宮城の真夏の風物詩である七夕飾り（吹流し）と浴衣美女という“元気な宮城のイメージ”という対極のコラボにより、“頑張っ元のすばらしい宮城を取戻そう”というキャッチフレーズを打出し、復興の支援を呼びかけた。



宮城県人会のブース

イベント当日、普通ならば夏模様といわれるニューヨークの5月末にもかかわらず、空一面曇りで肌寒く、上着が必要といった悪条件だったが、人出はブース前で客寄せがなかなかできないほどの予想以上の混雑ぶりだった。道行く人は立ち止り、新聞スクラップに目をやっては、ドネーションをしてくれたり、アメリカにおける人々の優しさを改めて感じ取ることができた。それから、商品の売上げに関しても、日本茶をはじめとした冷たい飲み物の売れ行きは残念ながら低迷したものの、おにぎりや日本のスナック（共に数百個）は完売、Tシャツも思いのほか売れ、終わってみれば1日だけで\$2,000の募金を集めることができた。イベント参加費（ブース代、テーブル代などの必要経費約\$100）を差引いても、十分に寄付金が集まり、大成功に終わった。

4. おわりに

今回のイベントに参加しての率直な感想だが、この震災が起こったことが発端だといえ、宮城県人会の活発な取り組みや故郷に対するただならぬ思いというものを知ることができるきっかけとなった。また、一緒に作業をする中で、宮城県人会には、アーティスト、弁護士、商社マン、テレビ関係者といった様々な業種や、活動を行っている方々が勢ぞろいしており、このネットワークをさらに深め、今後ニューヨーク事務所における宮城関連の事業を行う上で、協力を仰いでいくことはかなり有効なのではないかと感じた。

引続き、遠いニューヨークの地から、日本及び地元宮城のためにできることを、模索していきたい。

(伊藤所長補佐 宮城県派遣)